



# 姉妹の友好を深めに

＝第7次ウラン・ウデ市訪問団の報告から＝

留萌市と姉妹都市であるソ連ウラン・ウデ市を、去る六月二十九日から七月八日まで、第七次の留萌市代表団が親善訪問しました。今回、ウ市を訪問したのは、安代康一氏(市議会代表) 古川数登氏(経済界代表)と隣りの増毛町からは北野繁夫氏(町議会議員)の三氏です。また、日ソ友好親善道北市民使節団として、佐藤友義氏(市産業港部長)を団長とする七名が、六月二十三日から一週間、サハリン(旧樺太)へ市内の文化・経済・青年団体を代表して参加しました。では、ウラン・ウデ市訪問記を安代氏に、サハリン訪問記を佐藤氏にレポートしていただきましたのでご紹介いたします。

ウラン・ウデ市と留萌市が姉妹都市の縁結びをしてから七回目の代表団として私たち三名は、去る六月三十日から五日間、より姉妹の友情を深めるための訪問をいたしました。

現在、ウ市は人口約三十五万人で、留萌市と姉妹都市を締結した当時(昭和四十七年)の二十六万人に比べ、年間一万四千人も増加しており、開発途上の新興都市といえるでしょう。

ウ市の五日間を、つぶさに見て来ましたので、紀行文にしてみました。

▽六月三十日 ウ市を公式訪問。ウベエフ市長、アレクセーエフ第一副議長、ボスカニヤンツ第二副議長(留萌へ四回目の来訪者)の出迎えを受け、原田留萌市長からのメッセージを朗読する。ウベエフ市長は「相互友好親

善のきずなを強くしていきたい」と語っておられました。その後、ウラン・ウデ市の概要及びプリアート共和国の説明を聞きました。

とくに、ソビエト政権になって婦人の地位が向上し、可憐な家事労働からの解放のため、多くの施策がとられています。保育園や幼稚園の施設は、予想以上のものでウ市には、約百二十か所もあります。



楽しく食事をするウ市の園児たち

また、小中学校は約五十校、大専門学校が四校、高等専門学校が十七校もあり、教師から医師、音楽家、歌手までの専門家を養成しています。▽七月一日 ウ市より東南約六十キロに位置するラマ教の寺を見学する。ここは、シベリア地域の総本山でもあり、大僧正ゴンボエフ・ハイボラルと号す。弟子が三千人ほどおり、私たち日本人が来訪したのも二回目とのことでした。カラシネ湖のビヨネルキャンプ場を見学。

ここでは、中学年度の学生が夏休み期間中(六月から八月末まで)自然環境を利用して、計画的に果樹園や農園の自給栽培を行なっていました。

## 多種民族による民族祭典

▽七月二日 プリアート民族祭を見学する。場所は、三万人が観覧できる国立競馬場で行なわれました。競馬、オートバイ、レスリング重量あげなどが行なわれ、とくにレスリングなどは六十歳以上の競技で、年代を超えた競技と思えました。

民族祭典は、年一回、プリアート共和国の三十六の民族が、一同に集まり、共栄共存の表徴である。戦後、この地で傷病死された日本人五百九十二名がウ市を一望できる丘に整然と並べられ、異国の丘で最愛の肉親に想いをほせ送られた日々を想像すると、胸が熱くなり、涙をぬぐい切れませんでした。また、三十二年間、芝生の整備や墓をいねいに扱われたウラン・ウデ市民と市の執行者には、深い感謝するところがあります。私たち三名は、五日間お世話になったウラン・ウデ市民とウ市に眠る五百九十二名の英霊が安らかに眠るよう祈りながら、姉妹都市ウラン・ウデ市をあとにしました。



一日3万羽の鶏を加工する畜食肉工場

## 鶏の加工品は海外にも輸出

土俗学博物館では、プリアート共和国創設以前の農機具や衣類などが展示され、時代の変ぼうが一目でわかるように配置されています。

▽七月三日 図書学部、文化学部のある文化大学を見学。教育期間は四年で、現在、学生数は、通信教育課程を含め五千人が入学しています。ソ連邦科学アカデミーウラン・ウデ支部研究所は、一九六六年に設立され、インドチベット医学部物理学部、経済学部で構成されています。また、バイカル湖周辺の植物中七十種が薬草のため、薬草の研究



「友好親善を強めていきたい」とウベエフ市長は語る

や地質学の研究、天然資源の開発など調査研究が行なわれています。

プリアート共和国最大の畜食肉生産工場では、鶏を一日、三万羽加工し、ウ市はもとよりプリアート共和国内の需要ならびにソ連邦の需要を満たし、海外へにも輸出されています。ここでは、昨年、来留したシチーロフ食肉産業長と会い、友好を深めました。

## 日本人の墓を墓参

▽七月四日 テプロプリボール幼稚園・保育園を見学。一歳から六歳までの幼児を保育しており、保育児二百五十名、保育母七十名、医師も二名います。

この施設は、各企業団体から援助を受け、福祉活動の充実を図っているとのことでした。日本人墓園を墓参。墓参したことは、日本人で私たちが初めてのことでした。

ウ市中心街から西方七キロ地点にあり、小高い丘の中腹で墓園の周辺は針葉樹に囲まれ、緑の芝生の中には真白いコンクリートわくに

囲われた墓が、整然と並び、一人ひとりの名前が日本文字で刻まれていました。戦後、この地で傷病死された日本人五百九十二名がウ市を一望できる丘に整然と並べられ、異国の丘で最愛の肉親に想いをほせ送られた日々を想像すると、胸が熱くなり、涙をぬぐい切れませんでした。また、三十二年間、芝生の整備や墓をいねいに扱われたウラン・ウデ市民と市の執行者には、深い感謝するところがあります。私たち三名は、五日間お世話になったウラン・ウデ市民とウ市に眠る五百九十二名の英霊が安らかに眠るよう祈りながら、姉妹都市ウラン・ウデ市をあとにしました。



日本人の英霊よ安らかに…

(安代康一記)



旧豊原の日本人墓地にて

## 友好と親善の輪を広げに

一日ソ友好親善道北市民使節団から

道北市長会が主催した日ソ友好親善道北市民使節団の一行149人は、去る6月23日から29日までの1週間、サハリン州(旧樺太)の首都ユジノサハリンスク市(旧豊原)など3市を訪問し、友好親善の輪を広げて帰国しました。

留萌市からは、佐藤友義氏(市代表)北出勉氏(経済界代表)和田英克氏(文化団体代表)佐々木寛氏(体育団体代表)道添かね氏(婦人団体代表)夏井房尾氏(青年団体代表)中西民夫氏(労働団体代表)の7名が参加しました。

私達が、今回訪問したのは、ホルムスク(旧真岡)ネベリスク(旧本斗)ユジノサハリンスク(旧豊原)の三市でした。いずれも、教育、住宅、福祉の面で、日本とは異質な充実ぶりを見せており、大いに学ぶところがありました。

ユジノサハリンスクの幼稚園では、生後二か月から七歳までの幼児二百八十人を七十二人の母母や医師、看護婦が、つきつきり世界話をしています。道路は、ホルムスクとネベリスクの間で未舗装が大半でしたが、五階建てのアパート群が各市にあり、また、ユジノサハリンスクには十二階建ての高層アパートも登場しています。ホルムスクは、人口が留萌と同じくらい約四万人でしたが、タバコの吸いがら道になかったのが、とても印象的でした。

また、戦前の建物が残っていたのは、ホルムスクの真岡駅と真岡郵便局、旧王子製紙やユジノサハリンスクの博物館など、それほど多くはありませんでした。行く先々では、熱烈な歓迎を受け、私達訪問団も、たとえ言葉が十分通じなくとも、彼らの真心を膚で感じて来ました。七日間の短い旅でしたが、友好親善を深めるには、絶好の機会だったと思います。再度、豊かな国づくりを目指すサハリンを訪問したいと思えます。(佐藤友義記)